

【特集】
幼児教育と
大学
認定こども園
「森のくまっこ」
開園

Feature

Close up! NUA-ism
～進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-QG
伊藤友美

Master Educator

マスターエドゥケーター

視界が開ける感覚
芸術教養領域 リベラルアーツコース 講師
フリーランスエドゥケーター
松村淳子

**名古屋芸術大学
産学官連携プロジェクト**

名古屋芸術大学×中部文具工業協同組合
「2020 文具デザイン プロジェクト」
キックオフミーティング

名古屋芸大グループ
通信

52
July
2020





2020年・開学50周年



アートで世の中を応援

2021年4月、芸術学部

新型コロナウイルスの影響で社会が大きく変貌しています。本学をはじめとする名古屋芸術大学グループのすべてが、大きな影響を受けています。しかしながら、こんなときだからこそ、「ゲイジツのちから」が必要であり、また「ゲイジツのちから」を信じるものであります。

本学は、2020年、開学50周年を迎えます。これにあわせ「アートで世の中を応援」というキャンペーンを始めました。はからずも、このキャンペーンはコロナ禍にある社会に投げかけるにふさわしいメッセージとなりました。本学は、こんな世の中だから、こんなときだからこそ、芸術が必要であると考えます。



メディア
コミュニケーション
デザインコース 4年
米村明莉さん

制作にあたった、メディアコミュニケーションデザインコース 4年 米村明莉さんにお話を伺いました。対面授業が始まった6月1日でしたが、米村さんは自宅からオンラインで受講。お話もオンラインでお伺いすることになりました。

新聞に大学の広告として掲載されることになり、本当にびっくりしました。思っていたよりも多くの人の目につくようなことになり、私なんか創ったものでいいのかなという気持ちになりました。もともとは、特別客員教授の澁谷克彦先生の授業で、メディアコミュニケーションデザインコースの

ポスターを創るという課題で、大学名ではなく、メディアコミュニケーションデザインコースの「MCD」が入ったものでした。写真は、サッカーをやっている弟の試合を見に行ったときに応援する高校生たちを撮影したものです。最初に澁谷先生とお話した段階では、「がんばれ」とか「おは

よう」だとかいった単純な言葉しか思いつかなくて、そのままでは面白くないねということになり、応援の言葉ってがんばれだけじゃないよね、という意見をいただきました。応援している高校生たちの姿を思い出し、すごく声は出ているけど、離れて聞いていると何を言っているのかよくわからな

い(笑)。それをビジュアルで表現してこのような形になりました。何を言っているかわからなくても伝わるものがあり、味方の声だけですごくモチベーションが上がったり、力が出たりすることってたしかにあるなと思ひ、そのことがストレートに表現できたことが良かったのだと思います。



に新領域・新コース誕生



名古屋芸術大学
NAGOYA UNIVERSITY OF THE ARTS

中日新聞 全30段広告
(月刊プレーン誌 2020年8月号掲載)



櫃田珠実 教授

濑谷先生は、資生堂宣伝部のインハウスデザイナーだったこともあり、企業から見た目線をしっかりとお持ちで、私自身とても勉強になります。

濑谷先生の授業で、コミュニケーションをテーマとした課題を考えていたとき、それならば高校生にメディアコミュニケーションデザインコースをアピールするポスターにしようと思案して下さり、このような課題が実現しました。A&Dセンターでのレビュー展を広報の方が気に入って下さり、課題が大学広報へと発展し、非常に嬉しく感じています。米村さんの持ち味である、爽やかでストレートな表現がうまくマッチした作品となりました。

櫃田先生から、自分の好きなテイストがあるなら、それにこだわって続けることも大切、続けることで自分の強みになる、と言われています。私は、最初に浮かんだアイデアを考えなおし、いろい

ろと手を加えて創っていくということをやりますが、結局、全部捨てて最初のアイデアに戻ってしまうことがよくあります。自分のやりたいことを貫くということが大事なことだと思っています。

新型コロナウイルス対応方針

学生の皆様 新入生の皆様 保護者の皆様 教職員の皆様
その他、本学関係者の皆様へ



新型コロナウイルス感染症 「緊急事態宣言」への対応及び 危機対策本部の設置について

名古屋芸術大学 学長 竹本義明

新型コロナウイルス感染症拡大にあたり、4月7日に安倍総理が改正新型インフルエンザ等特別措置法に基づく緊急事態宣言を、また、4月10日に大村愛知県知事が「愛知県緊急事態宣言」を発出しました。

これらの「緊急事態宣言」の発出を受け、名古屋芸術大学の設置母体である学校法人名古屋自由学院では、新型コロナウイルス感染症が拡大している事態を学院全体として危機事象と捉え、4月10日、新型コロナウイルス感染症へ対応するために危機対策本部を設置し、大学機能の維持に努めるとともに、感染拡大防止と学生、教職員及び近隣住民の安全確保を第一優先とし、併せて国や自治体の要請に積極的に応えるよう、早期から対応してきました。

たとえ一時的にはあっても、教育研究機関である大学が、施設を閉鎖し教育活動を休止しなければならない事態は開学以来の危機であり、まさに苦渋の決断でありました。しかし、学生、教職員の健康を確保するとともに、公共財としての大学においては、社会的な価値を保つためにも、このような決断が適切であると判断しました。

6月1日からは、オンライン授業に併せ、感染予防対策を実施した上での対面授業を行っています。今後、感染の状況に応じて教育活動ができるよう指針を定めて対応しております。

これまでも入学式の中止や授業開始の延期等、度重なる変更をお願いしておりますが、学生、保護者、教職員の皆様のご理解、ご協力のおかげで大きな混乱を招くことなく、感謝している次第です。今後とも、なお一層のご理解、ご協力をお願いいたします。

名古屋自由学院、そして名古屋芸術大学の建学の精神は、「至誠奉仕」です。これは、「人間性の不断の陶冶」という謙虚な姿勢を持ち、「豊かな感性」により獲得できる他人への思いやりや物事を見抜く力を得て、社会に貢献できる「想像力に富んだ人材」を育成する、という学院の教育理念を表した言葉です。

新型コロナウイルス感染症に立ち向かうために、名古屋芸術大学の学生、教職員に求められているのは、この「至誠奉仕」の精神ではないでしょうか。

「豊かな感性」により獲得できる他人への思いやりや物事を見抜く力から、自分の健康を守るだけでなく、他人への感染を防ぐために、「人間性の不断の陶冶」という謙虚な姿勢において節度ある行動をとり、社会に貢献できる「想像力に富んだ人材」となることによって、感染症拡大を抑制し、大学、そして社会を正常な状態に戻すことができます。そのためにも、建学の精神に立ち返ることが必要であると考えます。

本学の学生、教職員が持つ名古屋芸術大学の力、「ゲイジユツのちから」が、今まさに試されています。

この難局を乗り越えるためには、大学執行部の力だけでは到底、及びません。学生、保護者、教職員、その他、本学に関係する皆が一致団結し「オール名芸」としなければ乗り越えられません。皆様方には、たいへんご不便、ご無理を強いることとなりますが、大学、そして社会を正常な状態に戻すために引き続きご協力を賜りますようお願い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症についてのお知らせを本学ホームページ上に集約し、随時更新しています。最新の情報をご確認ください。

【特集】
幼児教育と
大学
 認定こども園
 「森のくまっこ」
 開園



名古屋芸術大学グループには、名古屋芸術大学附属クリエイティブ幼稚園、滝子幼稚園、たきこ幼稚園、愛知保育園と4つの幼稚園・保育園がありますが、この4月に認定こども園「森のくまっこ」が開園されグループに加わりました。「森のくまっこ」は、北名古屋市立の熊之庄保育園と薬師寺保育園が統合されて新しくできた北名古屋市初の幼保連携型認定こども園で、運営組織の公募により社会福祉法人NUAが選ばれました。今回の特集では、グループの幼稚園・保育園の園長にお話を伺い、ご紹介するとともに、人間発達学部、さらに芸術大学と幼児教育との関わり合いについて考えます。



子どもも先生も、
遊びの中に成長がある

人間発達学部長
 人間発達学研究科長 学長補佐
 教授 溝口哲夫

幼保連携型認定こども園 森のくまっこ
 園長 松本真理子

**課外授業や芸大とのつながりに
 期待する声**

—森のくまっこの方針について教えてください。

松本：森のくまっこは、4月に開園したばかりの新しいこども園です。2つの公立保育園が統合され、新設されました。ご覧のとおり、まわりには田んぼや緑の自然が残るとてもいい環境です。そうした環境の中、生活や遊びを通していろいろな経験をし、泣いたり、笑ったりしながら成長し、生きる力を育てていきたいと思えます。

溝口：熊之庄保育園と薬師寺保育園が統合されたわけですが、どんなことが変わるのか、親御さんから戸惑いの声が届くようなことはありませんでしたか？

松本：事前に何回か説明会を行いました。教育・保育の方針を決めて昨年9月に大規模な説明会を開き、大勢の方に参加していただきました。保護者会はどうなるんですかといったことや、課外授業はどうするんですかといった、たくさん

の質問をいただきました。方針としては、こども園ですがもともとが保育園であり、保育を中心に据え、これまで公立の保育園ではできなかったことを充実させていこうと考えました。お母さんたちは子どもにたくさんの経験を与えたい、



でも、基本的に仕事を持っている方がほとんどなので時間的な余裕もなく、こども園に課外授業の充実や芸大とのつながりに期待を寄せる声がたくさんあります。保育を充実させつつプラスアルファを考えて準備しました。

溝口：どんなことが人気ですか？

松本：英会話が人気ですね。知り合いに英会話教室の講師をされている方がいて、お願いしてやっていただいています。園内でやっているの、英会話が終わってから延長保育に戻ることができるようにしています。それからレゴも人気ですね。また、スイミングスクールに園に迎えに来てもらうようにしたり、課外教室を紹介したり、園を起点としていろいろな経験ができる機会を紹介していて、とても喜ばれています。ただ、コロナの影響もあり、まだ課外教室など思うようにできておらず、楽しみにしていた親御さんから問い合わせがあることもあります。

それから課外教室のほかに、教育という部分でも期待があって、園では3、4、5歳児を対象に月刊絵本を購入しています。

溝口：希望者だけですか？

松本：全員です。公立だと親御さんの負担が増えることはなかなか難しいと思いますが、担任



幼保連携型認定こども園
森のくまっこ

〒481-0006 北名古屋市熊之庄城ノ屋敷2930番地
 0568-26-0130

<http://www.fukushi-nua.or.jp/morinokumakko/>



からも子どもたちに同じ教育ができるようにと要望があり、親御さんをお願いしてみました。反対もあるのでは思っていたのですが、意外にスムーズに決まり、やはり子どもに教育やいろいろな経験をさせたいという親御さんの要望の強さを感じました。

溝口：親御さんにとって、保育園が子ども園になり、どんなことができるようになるか、そこが一番の関心ではないかと思えます。公立の保育園ではできなかったこと、絵本や課外授業など、そうしたこともとても魅力的なことではないでしょうか。

もっともっと先生にも学生さんにも来て欲しい!

松本：大学との連携を期待する声も大きくて、音楽会を行ったり、ゼミの学生さんに来てもらったりすることもあるかと思えます。説明会でも質問があったんですが、親御さんたちがやっぱりすごく楽しみにしていて、いつですかと聞かれたりするんですよ。

溝口：今の状況下では、まだ何ともいえませんが、どんなことができるだろうかと考えています。

松本：じつは、小学校へ向けて配慮が必要な子がいて、親御さんも不安に感じています。なかなか相談にも行けず、そんなときに心理の先生に来ていただくことやお話を聞く機会があればと思うんですよ。たしかニコニコワークショップでも、そんな機会があったかと思えますが……。

溝口：ニコニコワークショップでは、未就園児のお子さんが親御さんと一緒に来て、ほかのお子さんや学生のお兄さんお姉さんと楽しく遊んだりしています。そんな中で親御さんから子育ての悩みや相談を受けることがあります。その場

合には、学部の先生が専門の立場からアドバイスをすることもあります。

松本：ぜひ、うちの園でもお願いしたいです！

溝口：もちろんです。私たちとしては、「森のくまっこ」「クリエ幼稚園」ばかりでなく、今後は北名古屋市との連携のもとに、広く地域の保育園や小学校からの相談にお応えできるような仕組みができればと考えています。他大学でも附属の保育園や幼稚園を持つところもあります。しかし、実際には物理的な距離とかさまざまな事情があつてうまく機能していないのが現状のようです。名古屋芸大の場合、クリエ幼稚園はすぐとなり、森のくまっかも歩いて数分のと



ころにあります。学生がボランティアに入ったり、日常的につながりがあつたりするのは、大学としてもとてもいいことだと感じています。ただ、もっともっと学生たちには、保育・教育現場のことを知ってほしいと思っていて、そういった機会を増やしたいと考えています。森のくまっかも、新たな活動の場として考えられたらいいなと思っています。

大学では、「ボーダレス」の観点で学部や領域の垣根を取り払った様々な取り組みを推奨しています。人間発達学部だから保育、教育ということではなく、東西両キャンパスの学生たちが一緒になって、ワークショップを開いたり、子どもたちを交えて演奏したり、ものづくりをしたりすればとても楽しいですよ。実際にクリエ幼稚園では、すでに東西キャンパスとつながりがあり、園児の作品を大学で展示したりしているんですよ。

松本：そうなんですよ！ うらやましい!! 安全で、楽しくて、子どもたちが興味を示してくれる

ものが一番！ 新しいものも、どんどん取り入れていきたいと考えています。

幼稚園・保育園と大学、小学校の連携も

溝口：小学校に勤めていたときから、やりたいと思いつけなかったことが、小学校と幼稚園・保育園との連携、幼保小の連携なんですよ。年度末に、次年度小学校に入る子どもたちの様子なんかを知らせてもらうということはやっていますが、先生同士で話すだけではしっかりと伝えることは難しいと思います。入学前に小学校を体験する、あるいは小学校の先生が子どもたちの実際の様子をここへ見に来るといったことができれば、小学校へ上がった後も戸惑うようなことは少なくなると思います。ぜひ、やってみたいですね。

松本：小学校の先生に少しだけでもお話ししてもらったり、子どもたちを見てくれるだけでも、親御さんはとても安心すると思います。

溝口：心配事など先生と少しでもお話しできると違いますよね。そんなことができればと思います。じつは、昨年の9月から、小学校の子どもたちを大学に招いて、人間発達学部の教員

や学生が先生になって授業を行う「子ども大学」というイベントを開催しました。初めての試みでしたが、熱心に授業に参加してくれて、大きな手応えを感じました。幼稚園、保育園と大学、さらに小学校、中学校とつながりが少なかったわけですが、地域的にもうまく連携が取れるようになればと思っています。



幼保連携型認定こども園 森のくまっこは、令和2年4月に開園しました。自然豊かな環境に囲まれながら、「遊び」を通して様々なことを学び、生きる力を身につけていくことを教育・保育目標とし、名古屋芸術大学グループならではの感性教育を行っています。音楽領域の学生に楽器の生演奏を行ってもらったり、美術領域の学生に造形や制作を教えられるなど、名古屋芸大グループならではの取り組みを行います。





「子どもが好き」 ということが一番



人間発達学部 子ども発達学科長
教授 安部 孝

愛知保育園
園長 田中伸代

五感を養い、感性を伸ばす

—愛知保育園の特徴について教えてください。

田中: どの幼稚園、保育園も同じだと思いますが、子どもの幸せを第一に考える、情緒豊かな人格形成を養うというのが理念です。ポイントはそのやりかたにあると思いますが、ガチャガチャと気ぜわしくなく、ゆったりとした生活の中で子どもたち個々のいいところを見つめ、育む。職員も落ち着いて、じっくりと子どもを見る。そういうやりかたがだんだんできてきたのではないかと思います。

情操や感性がどういうことなのかというのは、とても難しいと個人的には思っています。感性といっても一人一人違います。ですから、私は大雑把に受け取って、子どもたちの関心、個性を尊重して伸ばしてあげたいと思っています。なにか教える教育をすることよりも、五感で感じる、五感を養うことを考えています。

今、力を入れているのが触覚と味覚です。最近では、管理栄養士さんも一緒になって「だし」を子どもたちと味わったんです。「鰹だし」や「昆布だし」を薄めて、それを舐めて当てるゲームみたいなことなんですが、子どもって敏感でよくわかるんですね。職員にとってもいい経験になりました。

それから、他の保育園にはない特徴としては、やはり芸大とのつながりがあります。といってもクリスマス会に音楽領域の学生さんに来ても

らただけですが、それでも違います。生演奏は素晴らしく、小さな子どもでもしっかり聴いて、体感していることがよくわかります。もっと、もっととそんな機会を増やしてあげたいと思います。

もう一つ、世代間交流も行っています。保育園のある地域は、中川区の工場と古い住宅が混在する地域で、高齢者が多いところなんです。近所の方にお声がけをして、お手玉や手遊び、歌など、伝統的な遊びを毎月やっていただいています。職員も、うちの保育園には20代から70代まで全世代いるんです。70代の職員は、泣いてる子どもでも抱っこして寝かしつけちゃう達人なんですよ。



安部: お話を伺って、とても安心しました。初めにおっしゃった子どもたちのことを見守ること、好奇心とか情操とかは、保育や幼児教育の表層がどんなに変わっても、決して変わらない考え方の根っこのところですよ。その部分のお話をされているんだろうと思って聞いていました。表

面的なことよりもそういった根本のところを大事にされているんだなと思いました。五感って、子どもそれぞれが自分で持っているものですよ。だから、外側ではなくあくまで子どもの内側にこだわる、そのことを一貫して話されているんだなあと。それが確認できてほっとしたといえますか、今日は来てよかった(笑)。今度、学生を連れて、見学というか、遊びに来ますよ。

世代間交流ですが、高齢者が子どものところへ行くと、最初、慣れていないのと怖そうなので、泣くんですよ。それが、どういうわけか子どもはすぐ慣れるんです。普通の大人より、高齢者の方が慣れるのが早いです。すぐに一緒に遊ぶようになります。どうしてなのかわからないですけど、観察していると、高齢者の方は、前に立つ保育者ではやらないようなこと、こっそり服を直してあげたり、ちょっと世話を焼くようなことを見えないところでやっているんです。そういうことも子どもはわかっているんだな、伝わるんだなと考えたことがあります。この保育園では近所の方が来られて、そういうことが自然にできているんだと思います。

ゆったりと子どもを育てる

田中: お母さんたちは、仕事を終えてから子どもを迎えに来ているわけで、さっさと支度をして靴を履かせて連れて帰りたいわけですよ。でも、そこでゆっくりと子どもを待って下さいと。



愛知保育園

〒454-0807 名古屋市中川区愛知町30-20
052-351-7014

<http://aichihokuen.jp/>

子どもは自分でできることをやろうとします。ゆっくりながらも一所懸命靴を履く。すると、お母さんはその姿を初めて見てびっくりします。そんなことがしばしばあります。入園して3ヶ月くらいすると、お母さんも自分が子どもだった頃を思い出すようで、だんだんとゆっくりとした、こちらのペースになってくるんです。

安部：今でいう特別支援教育に取り組んでいた頃です。僕を指導してくれていた先生が、配慮が必要なお子の親御さんは、当然のことながら、心身共に負担が大きい。だから、その家族には、保育園、幼稚園に入っていた3年間、4年間をあとから振り返ったときに「幸せだった」と感じさせてあげなきゃ、ということをいわれました。子どもにも親御さんにも「あのときはよかったなあ」という経験をさせてあげること、そういう役割も保育園や幼稚園にはあるのかなと思います。たぶん、子どもも大人も日々イライラを募らせながら生活していて、せめて保育園へ来たときにはほっと安心できる、そうした感覚や感じを与えていかなければと思います。この子どもたちみたいに、こんなに穏やかならいいですね。お母さんたちも、トゲトゲしく帰らなくてもいいもんね。

田中：そうですね。保育園に慣れてくると、お母さんたちは先生としゃべって、スッキリして帰っていきますよ。

スキルは子どもと一緒に 高めていけばいい

一人間発達学部には、幼稚園や保育園の先生になることを志望する学生がいます。園長先生なら、どんな先生になって欲しいと思いますか？

田中：保育園としては子どもが大好きなことですね。「ピアノが弾けないと駄目ですよ」とよく聞かれるんですが、ピアニストみたいにピアノが弾けても子どもが乗ってこなければ一緒に、うまく弾けなくても子どもが集まってくればいいじゃないですか。子どもが好きな人、子どもを包みこめる人、そんな人がいいですね。

スキルは、やっていくうちに身につけていけばいいですよ。大学を卒業する段階では身につけていなくて当然です。保育士というのは、子どもと接してそこから真剣になってスキルを上げ

ていくものですよ。子どもと一緒に高めていってもらえばいいと思っています。机上の空論ではないんだけど、いくら勉強してもそれがそのまま子どもに当てはまるとはかぎらないじゃないですか。

安部：ところが、実際に子どもと接したときに、自分の想像と違う。という最初の壁があって、「こんなはずじゃなかった」となる学生がけっこういるんですよ。

田中：为什么呢、子どもを美化しすぎというか。子どもって、もちろんかわいいですけど、かわいいだけじゃないですよ。子どもの正面だけでなく、ちゃんといういろいろな角度から見ても、それでも子どもが好きな人ですね。

安部：実習の途中で行けなくなった学生は、やっ



田中：保育にかかわるということは、親御さんが見ることのできない一番大切なところを見ることができるとですよ。立った、歩いたを親御さんよりも先に私たちが見ることが多い！

安部：幼稚園の教員をやっていたときも、先生のおかげでこんなことができるようになりました。なんていわれたりしましたが、ごめんね、僕が一番いいところをいただいてしまつて。一番いいところに遭遇してるのが保育者。その現場に立ち会えるという感覚。こういったことのよさも学生

にちゃんと伝えてなかったかもなあ。
田中：感動ですよ、歩いた！とか(笑)。
安部：そうそう！歩いた一つ！ですよ(笑)。

にちゃんと伝えてなかったかもなあ。

田中：感動ですよ、歩いた！とか(笑)。

安部：そうそう！歩いた一つ！ですよ(笑)。



愛知保育園は、昭和29年9月1日に名古屋市中川区愛知町において愛知県知事(当時は桑原幹根知事)から個人立の保育所として許可を受け、現在創立63年目を迎える歴史ある保育園です。平成29年4月1日から、名古屋芸大グループ法人である社会福祉法人NUAが運営を引き継いでおり、「何事にも興味・関心を持てる豊かな心を育む園」を保育目標として掲げ、職員が一丸となって運営しています。





小さいながらも園庭には柿や枇杷などの果樹が植えられ、築山、丸木などあり、自然が感じられる。子どもたちは、裸足で泥だらけになり、元気に遊ぶ



子どもたちの作品の一部。いろいろな形が組み合わせてデザインされ、ステンドグラスのように着色されている。制作には長時間の集中が必要であることが一目でわかる



教具に做って作られた世界地図。こちらもクオリティの高さに素直に驚く



モンテッソーリ教具がたくさん。しかし、そもそも教具には、0～3歳向けのものが少なく、職員らにより手作りされているものも多い



社会福祉法人 NUA

たきこ幼稚園

〒466-0047 名古屋市昭和区永金町1-1-32
052-882-0467

<http://www.fukushi-nua.or.jp/takiko/>



滝子幼稚園 園長
クリエ幼稚園 園長
木下真吾

大学とは物理的に離れているため関わりは少ないのですが、保育専門学校と隣接していることもあり、実習やプレ実習などカリキュラムの中で学生さんに来ていただいています。また、アルバイト

という形で学生さんに来ていただき、非常に助かっています。クリエ幼稚園へは、年間を通して多くの先生、学生さんに来ていただいています。こちらとも連携を深めていければと思います。入園式や卒園式には生演奏に来ていただいていますし、こうした機会が増えることは子どもたちにとっても非常に有意義なことだと思います。美術やデザインなどの領域と連携するようなことはあまりありませんが、子どもたちにとっては本物に触れる機会があればあるほど有意義だと思います。

滝子幼稚園は附属とはなっていませんが、名古屋芸大グループの一員としてつながりを増やしていければと思っています。

私自身、これまで小学校、中学校の教員として勤めてきており、幼稚園や保育園の子どもたちのような小さな子どもたちの育ちを支援していくことは初めての経験です。まだ自分の意思をうまく伝えられないような子の教育に、小学校とはまた違う難しさと同時にやりがいと面白さを感じています。



学校法人名古屋自由学院

滝子幼稚園

〒466-0047 名古屋市昭和区永金町1-1-15
052-882-0464

<http://www.nua.ac.jp/takiyo/>



滝子幼稚園は「一人一人の個性を大事にした豊富な生活体験により、その子らしい考え方や感じ方、取り組み方を実現していく過程を大切にする」を長年、教育理念に置いてきました。その子らしい考え方や感じ方、取り組み方を実現させていくためには、子どもが自分で考え、気づき、工夫して主体的に遊ぶことが欠かせないと考えています。この自尊感情は、生きる力の基礎となる重要な要素であり、その育ちを大切にした教育活動を展開しています。



たきこ幼稚園 園長
武石協子

たきこ幼稚園は「子どもの幸せと健やかな成長」を最優先に考え、見て・やって・教えて学ぶ体験を大切にしています。開園当初からモンテッソーリ教育を導入し、開園から7年目になり、やっと教具などが整ってきたところです。住宅街の中の小さな園ですので、なんとかして子どもたちに自然に触れさせたいと思い、園庭にみかんやびわ、柿など果樹を植え、年間を通して自然を感じられるようにしました。また、園庭には小さいながらも築山や丸太を配置し、裸足で遊ぶことができるようにし、あわせて毎日のリズム遊びで体力をつけ、頑張りのき

く強い身体を育てています。園のまわりを1周するだけでへとへとになっていた子ども毎日の活動の中でしっかりと歩けるようになっていきます。

乳幼児期は虫や草、石ころなど小さなものに興味を示す敏感期です。バーチャルでなく、直接触れて体験することが大切な時期に、五感を洗練し、丈夫でしなやかな身体を作ることをベースに活動を自分で選び、手指を使い、繰り返し集中して目的を達成するという、モンテッソーリ教育を実践しています。子どもたちが思わず手に取り、やってみたくなる教具を先生たちが工夫して手作りしています。



たきこ幼稚園は、平成26年4月1日に名古屋芸大グループ校として、乳幼児の保育と名古屋芸術大学及び名古屋芸術大学保育専門学校の保育者養成機関としての実習を目的として開園しました。保育専門学校のキャンパス内にはたきこ幼稚園のほか、滝子幼稚園もあり、保育の専門学校、幼稚園、保育所が同じ敷地内にあるのは県内初です。ここでは、キャンパス内が一体となり乳幼児の保育及び教育に取り組んでいます。



クリエ幼稚園 担任
窪田仁美

まず建物が面白いですよ。お部屋が六角形で正面がありません。廊下もなく、移動する場合には必ず別のお部屋を通ります。そのことで、必然的に他の年齢の子どもとの交流が生まれたり、

邪魔をしないように静かに通ったりと、いろいろなことが自然に身につけていきます。

大学と隣接しているため交流も深く、親子でオーケストラを見に行ったり、西キャンパスで版画や紙漉きのワークショップを体験したり、昨年はミュージカルコース、エンターテインメントディレクション&アートマネジメントコースの方たちにミュージカルを幼稚園で上演していただきました。たくさんの機材が運び込まれ、衣装も本格的で、子どもたちも職員も大いに楽しみました。こうしたイベン

トの他にも、人間発達学部のゼミの学生さんや音楽のボランティアなど、普段から来ていただく機会が多くとても助かっています。

先生を目指す学生さんには、実習やプレ実習に来てもらうことがあります。幼稚園・保育園の仕事っていいなと思ってもらえる保育の場となるよう心がけています。園児たちには、卒園してから幼稚園って楽しかったと思えるようないい思い出をたくさん作って欲しいと思います。

先生たちは、やらせる保育ではなく、子どものやりたいことを伸ばす、子どもが自分の遊びを見つけられる、のびのびとした環境にしたいと話合っています。



園舎の裏側にはビオトープとして小川と池があり、ザリガニ釣りをはじめ、さまざまな生物と触れ合うことができる



大学に隣接するという地の利を生かし、園児が大学へ赴くこともしばしば。西キャンパスでのワークショップや演奏会の鑑賞など、いろいろな体験ができることもクリエ幼稚園の魅力となっている

名古屋芸術大学 附属クリエ幼稚園

〒481-0006 北名古屋市熊之庄射矢重95
0568-24-0324

<http://www.nua.ac.jp/crea/>



クリエ幼稚園では、自分の頭と身体全体に働きかけて物事を発見したり感じ取ったりする力を伸ばし、次代を拓くにふさわしい「明るく聡たくましい」子に育つように努めています。また、恵まれた周囲の自然環境、広い園庭を生かし、大学や地域との関係を深め、幼児の可能性と個性を育み広げています。愛園会活動に加え、「サポーターズ」活動が盛んで、保護者も楽しく参加できる教育活動も展開しています。



人間発達学部の可能性を拓げる試み 「子ども大学」を実施

昨年の11月と12月、今年の2月と3回にわたり、小学生が本学人間発達学部の教員、学生から講義を受ける「子ども大学」が実施されました。西キャンパスでは例年、夏休みに美術、デザインの講座を受講する「一日芸大生」が実施されていますが、「子ども大学」はその人間発達学部版といったところ。理科工作、パソコンを使ったゲーム作り、楽器&ハワイのレイづくり、バランスボールを使った運動、さらに、赤ちゃんのお世話といった保育の講座などが用意され、師勝北小学校3~6年生、24名が受講しました。講義に加えて、「芸大祭」と「春を呼ぶ芸術フェスティバル」の見学もあり、盛りだくさんの内容です。最終回には卒業式も行われ、角帽を被り、学部長の溝口先生から修了証書が授与されました。修

了後のアンケート(卒業レポート!)では、楽しかったという感想や、来年もやって欲しい、3日間では足りない、もっと先生の専門分野の講義が聴きたかったなどなど、予想を上回る反応と要望が寄せられました。大学に関心や興味を持ってもらうことや、大学と地域の関係を深めることに加え、大学が担っている「教育するという役割」として、学生が教える立場になることで、教員の育成と、さらにその先にある子どもを育てるということと同時に果たす形になり、とても意義深いイベントとなりました。

今年度は、新型コロナウイルスの影響もあり、まだ予定が立てられない状況ではありますが、今後の発展が大いに期待されるものとなりました。

名古屋芸術大学 子ども大学

入学式の様子

人間発達学部長
人間発達学研究科長
学長補佐
教授 溝口哲夫



11月開催時には、「芸大祭」も同時に行われました



昼食は学生スタッフと一緒に「芸大祭」で



角帽を被って修了証書の授与。3日間の講座でしたが、本格的な卒業式となりました



かんたん楽器&レイづくり



Worldea オナズプログラムのハワイ研修に参加した学生スタッフが、報告会と「かんたん楽器&レイ作り」を行いました。ハワイでの体験活動や、小学校、保育園の様子も写真を交えてレポートしました。

赤ちゃんのお世話



吉村美由紀 准教授



小田良枝 准教授

生まれたばかりの赤ちゃんって、どうやって抱っこすればいいの？お風呂はどうやって入れる??おむつは???赤ちゃんのお世話について体験しながら学ぶプログラム。赤ちゃんが思ったより重くてびっくり。抱っこのやり方を友達に教えてあげたいという声も聞かれました。

弾んで遊ぼう“Gボール”



堀場みのり 講師

Gボール(バランスボール)を使っでの運動。いろんな姿勢でバランスをとったり弾んだり。カラフルなボールは気持ちも上がります。音楽に合わせて振り付けを練習してダンスにも挑戦。難しいけど、身体を動かすのはやっぱり楽しい!

「春を呼ぶ芸術フェスティバル」鑑賞



人間発達学部、恒例の春のイベント。合唱、ピアノ演奏、サークル発表、などなどじっくり鑑賞しました。大学って、なんだかとても楽しそう!一緒に過ごしたお兄さんもお姉さんも、みんな優しかった。

楽しい理科工作



東條文治 准教授

はさみ、ホチキス、セロテープで作る、簡単な理科工作。ブーメランや風車、面白い形の紙飛行機を作って、遊びました。男の子から大人気!先生が専門の、自然科学や古生生物の話がもっと聞きたい、実験もやってみたくてリクエストも。

パソコンでゲームを作ろう!



加藤智也 教授

ブロックを組み合わせる感覚で簡単にプログラミングできるツールを使って、ゲーム作りを体験。子どもたちは夢中でパソコンに向かいました。もっともっとやりたかった、時間が足りないという声をたくさんいただきました。



人間発達学部
子ども発達学科長
教授 安部 孝

このところ、産官学連携やボランティアなど大学に期待する社会の声が大きくなり、教員や学生達がいろいろな場所へ赴くことが増えました。ですが、本来、大学や学校というのは、学生や子どもが集まり、人が集まってこそその場所です。大学が持つ本来的な役割を見直してみたらという考えがはじめにあり、子どもを集めよう、大人も集めようということで「子ども大学」という形になりました。そして、人に来てもらうので

あれば、地域の人たちに学生が普段使っている設備と施設を使い、見てもらうことがいいと思いました。クリエ幼稚園の園長を務めた経験から、卒園した子どもたちにもう一度大学に来てもらえるような機会をつくりたいという思いもありました。

昨年は初めての試みでしたので、師勝北小学校に限定して参加者を募り、24名の小学生が参加してくれました。実際に講義を行い子どもたちの反応を見て感じたのが、大学と教員個々が持つ「教育する力」の価値です。子どもたちは非常に熱心にそして、いきいきと講義を受け、時間が足りない、もっとやって欲しい、という声をたくさんいただきました。子どもたちに学ぶことの楽しさをわずかでも伝えられたのではないかと思います。そして大学の持つ「教育力」をあら

ためて感じました。運営と企画には、学校教育コースをはじめとする多くの学生がかかわってくれました。このことも教員を目指す学生には、地域と協働し、実践力やコミュニケーション力を高めるとても価値ある経験になったのではないかと思います。また、教員にとっても地域における教育力となり、新たな可能性への気付きや、研究課題の発見・解決につながる、大変意義深いものとなりました。人間発達学部にとっても、さらなる可能性を拓ける機会になったのではないかと思います。北名古屋市には小学校が10校あります。本年は新型コロナウイルスの影響によりまだ思うように活動できませんが、長期的な視点に立ち、「子ども大学」の活動をさらに拡げて継続していきたいと考えています。

Close up!

進化する「名古屋芸大」のDNA

NUA-ism

Vol.103
NUA-OG
伊藤友美

(いとう ともみ)

パウダーフーズフォレスト株式会社
制作部 デザイナー
<http://www.pfforest.com/>

1991年 愛知県生まれ
2014年 ヴィジュアル
デザインコース卒業
プリ・テック株式会社入社
2020年 転職し、パウダーフーズ
フォレスト株式会社入社



現在は、コーヒーやフルーツ
のパウダーなどを手がける企
業にお勤め。最新作は菓ご
り需要に応えるパンケーキ
ミックス。「お客さま対応では
なく、自社製品なので働き方
に融通がきくようになりました。
試行錯誤を重ねながら、自社
の販売サイトの制作や商品
写真の撮影をやっています」



デザインという仕事



お話を伺った伊藤さんは、学生時代、ページ下のシヤチハタ株式会社の「手洗い練習スタンプおててポン」のアイデアを提案した方。卒業後、印刷・Web制作会社へ就職した後、転職して現在はメーカーのインハウスデザイナーとしてお勤め。定時後の会社へお邪魔し「おててポン」のアイデアについてや、現在のお仕事、デザイナーとして企業に勤めることのリアルをお伺いした。

れてはっとしました。一緒に何案か安パイの代案も考えていたと思います。

伊藤さんは、デザイナーとして就職するが、学生時代から企画や開発のセンスを持ち合わせていたようで、入社して数年もするとデザインの仕事に加え、Web系の仕事をする部署へと異動となった。「入社して2年間は、グラフィックデザイナーとして紙媒体のデザインをやっていました。後々、アートディレクターになりたいと考えていて、仕事をしながら勉強したりしていました。会社でそんな希望を出していたところ、デジタルソリューションというWeb制作の部署へ異動となりました」 Web制作の部署へ移り、サイトの制作や広告運用の提案を行うなどの仕事をするようになった。現職へ転職するまでの間、数々の案件をこなした。中には、東海地区の方なら誰もが知るような大きなクライアントの仕事も多数含まれる。「学生時代から、私は企画とかコンセプトがしっかりしていないとなかなかデザインができないタイプで、適性はもしかするとこっちにあるのかもしれないと思いますね。企画書を書いて提案する仕事が増えました。ただし好き嫌いでいえば、企画書を書くよりもデザインの仕事が好きで、仕事に追われる中、やっぱりデザインの仕事をやりたいなと考えるようになりました。」

「シヤチハタさんとのコラボに私が参加したのは3年目で、それまでの先輩が出した作品を見ることができたんです。それで、もうアイデアは出尽くしてるなと思いました。とりあえずいろいろな方向性を考えてみて、メモに書き出してみたりしていました。たしか、このアイデアがものになるかなと感じたのは、お風呂の中。よく、買うものとか明日忘れちゃいけないものを手にメモしたりするじゃないですか。それがお風呂で洗うと消える。消えることを確認し、なんとかなるかなあと思った記憶があります」 ぱっと浮かんだアイデア、そのときはそれほどいいアイデアとは思っていなかった。むしろ、突飛すぎて駄目じゃないかと考えたという。「アイデアとしてちょっと変かなと思ひ、先生にいうにも恥ずかしいというか、めっちゃくちゃのような気がして、たくさん前置きしながら説明しました(笑)。話してみると、すごくいいよといわ



「おててポン」について伺いました

シヤチハタ株式会社と本学の産学連携ワークショップで伊藤友美さんが提案したアイデアから「手洗い練習スタンプ おててポン」という商品が生まれたのは2016年11月のこと。それが、今年に入り、新型コロナウイルスの影響で、前年同月比で出荷数が10倍にもなっているそうです。商品開発のこと、本学とのコラボのこと、いろいろと伺ってきました。

ープレゼンの資料ですね。ちゃんと残してあるんですね。

松田主任(以下敬称略): 私は、その場において発表を拝見していました。当時、私はまだ入社3年目で、審査するのではなく、資料をまとめる役割で参加していました。企画の新規性といいますが、聞いていてなるほどと思ひとても印象に残っています。

ワークショップでは、もともと販売していた30mmと25mmの四角いスタンプ

を使い、その印面デザインを考えると課題でした。製品化するに当たっては、アイデアを生かせるように考え直し、洗面所などでも置きやすい小さなサイズに変えています。

向井室長(以下敬称略): 当社では、スタンプの使い方として「FAX済」や「領収済」といった事務効率を向上させる商品を中心に作ってきました。事務用品以外の使い方を模索するような動きも社内にもあり

まして、肌に押すようなアイデア、サッカードの応援で顔にペイントしたりしますよね、そんなものもあったかと思ひます。ただ、伊藤さんのアイデアのような用途提案、いつどんなふうにするかはっきりと用途まで考えたアイデアはとても新鮮でした。

ー製品化するまで4年近くかかっています。どんなことがあったんですか?

向井: 商品として見た場合はまだ完成で

はありません。商品化するためにはアイデア以外にもたくさん必要です。また社内には他にもたくさん商品化のアイデアがあります。4年というのは、じつは特別長いというわけでもないんです。

松田: せっかくなのでいいアイデアなので、それを生かせるようにと手直しさせていただきました。一番の機能は、しっかりと手洗いをさせることです。私にも子どもがいますが、妻に聞いてみたところ、しっか



多忙さも考えを後押しした。お客さんと直接やりとりし要望を引きだし、それを制作側へ依頼して作り上げていく。デザイナーであったため、ときには自分でも手を動かし制作に加わる。お客さんを持つ以上、やはり優先するのはお客さんであり、時間的な拘束も増えた。企画を練り、折衝し、自ら制作も行う。心身ともに悲鳴を上げ始めるのも当然だった。「ちょっと頑張りがすぎましたね。仕事はとて面白かったです。もうちょっとデザインの仕事がしたいなと思いました。デザイナーとしても成長できるところへ行きたいとも考えました」。

転職するに当たり、Web系の制作会社のディレクターとしてやっていくか、業界問わず広報室に入るか、メーカーに入りデザインをやっていくか、この3つを考えた。そして、自分の好きな感じのデザインを出しているところがいいと考え、現在の会社へ転職する。「工業系のところより、かわいい感じのデザインを出しているほうがいいなと思い、軽い気持ちで受けてみました。今の上司が面接してくれたのですが、とても相性がいいと感じ、とんとん拍子で話が進みました。今は一緒に仕事をしていますが、デザインの考え方も、アウトプットも

尊敬でき、とても勉強になります。会社を変わってまだ4ヶ月なので、まだお見せできるようなものはないのですが、広告写真やWebページなど、試行錯誤しながら作っています」。



「そんなことはないと思うんですが、社会人になるとお金をもらっているわけで、なんとなく誰も教えてくれないんだという感覚がありました。もちろん上司や先輩が丁寧に教えてくれるんですが、デザインのスキルは教えられるだけでは伸びないので、自分でやって覚えていくしかありません。けど、それがなぜかわからなかった。勤めだした頃は、最初から完璧なものを作りたいと無理をしていましたね。時間はかかりすぎるし、スキルも足りない。自分にできる範囲の仕事ならすぐできるんですけど、ちょっとそれを越えようと、もうぐちゃぐちゃでした。少しずつ成長していくしかないですね」以前の自分の働き方を述べた。ものごとくに近道はなく、遠回りに思えても一つ一つ積み上げていくしかないというのは実感だろう。現在は、一步一步デザイナーとしてのキャリアを積み上げていっていることを感じさせる。新しい環境ではつつと働いている様子が頼もしく見えた。



てあらいスタンプ

ウォッシュボン

10DD019 伊藤 友美

手を正しく洗っていますか？

ユニセフの調査では、手を正しく洗うことで年間100万人の命が守られるといわれています。先進国日本も例外ではありません。実際に正しい手を洗うのに必要な時間は約15秒、しかし20秒を超えて洗う人は47%しかいません。また、調査対象の10%は手を濡らしただけで汚れを手全体に広げてしまっています。トイレの後に手を洗わない子どもも多く、男の子では20%が洗っていないというのが現状です。

スタンプで解決！

ウォッシュボンは、手を洗うときに手に押すスタンプです。その印面を石鹸を使って消すことで、手が正しく洗えると同時に保護者の方が、簡単に子供の手の洗い方を指導することが出来ます。また、泡が印面の色に変わる為、小さい字も楽しく石鹸を使うことが出来ます。特に知的障がいを持つお子さんは指導が難しいため、印面が消えるなどの目印を利用することで正しい手洗いの方法が身に付きやすくなります。

ターゲット

保育園児や小学生とその親
知的障がいを持った方
学校などの教育機関
手洗いをめんどくさがる子供

使い方

- 1 親や先生が子供の手にスタンプを押す
- 2 手を石けんやハンドソープを使って丁寧に洗う
- 3 印面が消え、泡が印面の色になる
- 4 親や先生が子供の手を確認

印面デザイン

縦30ミリ
横25ミリ

印面の色は、青(C100 M20) 赤(M100 Y100) 緑(C100 Y100) 紫(M80 C80) を使用。
印刷するにも色が変わりやすいよう、びえくんのイラストには黒い線、まじろくんのイラストには黒い線が入っています。印刷に使うカラーも入れました。ちなみに「アソビくん」は未発表です。

使用例

- ・小学校や保育園等の教育機関での使用
⇒教師が全員の手がきれいかわかろうかを簡単に判断できる正しい手洗いの指導がしやすい
- ・家庭での使用
⇒母親が他ごとをしながらでも手洗い指導が出来る。石けんを使う癖がつく。持ち運べるので、外出先で子どもをトイレに行かせる等、親の目を離れたところでもチェックできる。父親とのコミュニケーションのきっかけに。
- ・発達障害や知的障がい者への使用
⇒きれいに洗うという抽象的な行為から、消すという具体的な行為に変わるので理解しやすい。また指導も指導しやすい

デザインの意図

今年、新入りのデザイナーが採用されたことを受けて、このスタンプをデザインしました。障がいのある方に押しやすいようなスタンプの形状をいくつか、新しく「消す」という行為を加え、親子で楽しめるようにすることを意識しました。印面はスタンプを押しつつも、ソープで洗って消えていくという視覚的フィードバックを重視しました。また、印面は、消すという行為が、ソープで洗って消えるという行為を促すようにしました。また、ソープは、ウォッシュボンを押す時に消えるように設計されました。

プレゼンの段階では、「ウォッシュボン」という名前でした。アイデアを最大限生かすため、大きさや印面デザインも見直しが行われました



デジタル
シヤチハタ株式会社
広報室 室長
向井博文 さん

デジタル
マーケティング部
商品企画課 主任
松田孝明 さん

りと手洗いさせることが難しいといえます。手洗いの習慣を身につけさせたいというのであれば、すぐ洗い流せるようなスタンプでいいのですが、しっかり洗うとなるとすぐ消えるようなものでは駄目です。研究開発部門に相談し、石鹸で洗っても30秒は消えないインキを開発してもらいました。もちろん、口に入れても問題ない安全性も確保しています。

向井：どの会社の石鹸で洗っても30秒かかるということも検証してるんですよ。
松田：たくさん試しましたね。インキとの相性もあるかと思いますが、極端にすぐ消えてしまわないように注意はしました。市販されている石鹸は、ほとんど試してみたのではないかと思います。

「印面のデザインも変わっています。デザインはいかがだったでしょうか？」
向井：伊藤さんのデザインは直球でパワーがありますよね。見た瞬間、何をしたいかがすぐわかります。提案とデザインの意味合いがすっきり理解できます。このまま商品化して、現行品とどっちがよかったらと思うですよ。
松田：悪魔っぽいデザインでしたが、怖がる方もいるので、悪者の表現を弱めてばい菌やウイルスに変更しています。それから「手」を入れて、手洗いを印象づけています。お母さんたちとコミュニケーションを取る商品や子ども向けの商品もこれをきっかけに考えるようになったかなあと。とても勉強になりました。

「グランド・カフス博士の庭」(2015、愛知県美術館) 特別展「芸術植物園展」に関連した複数のプログラムを企画実施
 空間デザイン：L PACK.
 空間施工：ミラクルファクトリー



「フジマツ美術館 開館記念展覧会」(2006、名古屋芸術大学) 在学中に行ったアートプログラムユニット「フジマツの最初のプログラム」参加者に、日用品を作品として展示することに挑戦してもらった



「あいちトリエンナーレ 2016」でのエデュケーションプログラム「はっけんツール キアラヴァンバッグ」。作品を鑑賞するためのヒントが詰まったバッグ。希望する来場者に無償で貸し出された



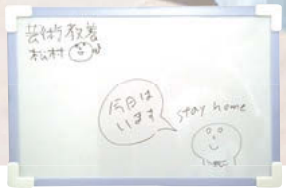
「あいちトリエンナーレ 2019」アート・プレイグラウンド はなす TALK 来場者が作品や体験の感想や考えたことなどを話して共有する場所(コーディネーターとして企画運営)



「グランド・カフス博士の庭」(2015、愛知県美術館) から「新種植物押葉記録」。夏の特別展「芸術植物園展」に合わせて行われたプログラム。花びらをコラージュして新しい植物を創り出す

マスター ↑↓ to エデュケーター

【第49回】
 < 視界が開ける感覚 >
 松村 淳子
 (まつむら あつこ)
 芸術教養領域 リベラルアーツコース 講師
 フリーランスエデュケーター



研究室にお邪魔したのは6月1日、対面授業が再開された日である。キャンパスには学生の姿が見られ、ようやく学校らしさを取り戻しつつある。しかしながら、以前と同じように見えても、行き交う人の全員がマスクをしていたり、何となく距離感が違っていたり、世の中が変わってしまったことをことさらに感じさせる。真新しい研究室をたずねると、がらんどうの空間にラップトップPCがボツンとあるだけ。しつらえられた本棚は、ほぼ空で何も入っていない。4月から時間が止まってしまっていたようだ。それでも、迎えてくれた部屋の主は、変わってしまった世界に何か活力を与えてくれそうな、そんな明るい雰囲気だった。

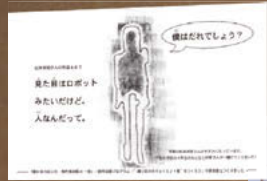
「フリーランスでエデュケーターをやっています。アーティストではなく、アートとそれを受け取る人たちをどうつなぐか、そういうことをやってきました」エデュケーターは、キュレーターともコーディネーターとも、もちろん作家とも異なる立場。美術教育に

かかわる職業だと想像は付くが、開けば、美術展などの来場者、観覧者たちに対して働きかけを行う認識だそう。むりやり日本語にすれば、美術教育普及担当者というところか。最近になり社会的にも認知され、ようやく市民権を得てきた職業である。「教育普及担当ですけど、教えるというよりは、ヒントをたくさん置いて、見た人に考えてもらったり、興味を持ってもらったりするきっかけを作るということをやっています」本棚から取り出した小さなバッグ。2016年のあいちトリエンナーレで、実際に貸し出したものだという。開けてみると、色の付いた円盤、砂時計、作品の一部を写した写真やオノマトペのカードなど、さまざまなものが入っている。「これを持って、作品を見てもらいます。円盤は回して止まったところの色が使われている作品を探してみる。写真はその作品を探してみる。砂時計は砂が落ちるまで3分かかるんですが、その間、じっくり鑑賞する。こんなふ

うに、作品を鑑賞するためのヒントや、新しいことに気が付くためのきっかけ作りをやってきました」なるほど、観覧者の視線を作品のさまざまな場所へ誘導する仕掛けがたくさん用意されている。

「私は美術文化学科の3期生なんです。高校時代、生物の先生になりたかったんですけど、進路を決めるとき、これまで巡り合った先生たちみたいになれかなと考えてみたら、到底自分にはなれそうにない(笑)。たまたま姉が名芸のデザイン科に通っていて、大学に美術文化学科というのがあり、向いているんじゃないかと言ってくれたんです。もともと絵を描くことは好きだったんですが、何かを表現するというよりもアウトプットされたものを見るのが好きで、これだと思いました」美術文化学科は、作家や作品の背景について研究するコース。そこにアートプログラムとして人に作品を見せたり、体験させたりする活動が加わっている。そのきっかけについてうかがう

「ミラーニューロン・トレーニング」
(2018, 愛知県児童総合センター)
「ものまね細胞」と言われるミラーニューロンに焦点をあてて、まねっこをする能力を鍛える複数のあそびのプログラムを実施。フジマツがリサーチしたミラーニューロン情報や参考資料も展示



「織り目のみりょくヒント集」をつくらう
(2018, 一宮市)
参加者とまちなかに展示された作品をまわって、面白かったところ、気になったところを紹介する、「見方のヒント集」を作成



「なかにわ」(2017, 東山動物園「植物会館」)
「植物のひ・み・つ」展に関連して複数のプログラムを実施。学芸員とコラボし、植物の秘密が語られる植木鉢の展示や、プログラムに参加したり、資料を読んだり、憩うためのスペースも設置

「日用品美術館」
(2014, 刈谷市美術館)
参加者が学芸員になり、身近にある日用品が美術作品だったら? という視点で見直し、展示、解説カード作成までを体験する



1984年 愛知県生まれ
2007年 美術学部美術文化学科卒業
2007-09年 メナド美術館勤務
2010年 「あいとりエンナーレ2010」アシスタントエディター
2011年 福山女学園大学附属小学校 クリプトメディアサテライトスクール造形教室講師
2012-14年 愛知県児童総合センター勤務
2014-15年 なごや子どもまちかど文化プロジェクト監修アシスタント
2015-16年 「あいとりエンナーレ2016」エディター

【プログラム・ワークショップ講師】

2012年 愛知県陶磁美術館「作品鑑賞プログラム 試してみる」
2015年 愛知県児童総合センター「つながるスゴロク」
昭和日常博物館×横須賀市美術館「SHOWA スパイ大作戦」
2013年～ 昭和日常博物館ワークショップ講師
2014年～ 北名古屋市東図書館ワークショップ講師
2015年～ 大口町歴史民俗資料館ワークショップ講師

学生時代に同級生の近藤令子とアートプログラムユニット「フジマツ」を結成。2006年、日用品を展示し、新たな視点から価値を問い直す「フジマツ美術館開館記念展覧会」を開催以来、現在まで数多くのアートプログラム、ワークショップを開催。

【フジマツでの活動】

2006年 フジマツ美術館開館記念展覧会
2012年 アートラボあいち「ALAのナオを集めて、ナノ本作り」
2013年 アートラボあいち「考える本」 「記憶の長者町」 「フジマツナーレ」 「フジマツ美術館サンキューアート展」
2014年 刈谷市美術館「ひかわり美術館」
2015年 愛知県児童総合センター「TENTO」
愛知県美術館ロビー「グランド・カフス博士の庭」
2017年 東山動物園 植物会館「なかにわ」
碧南市藤井達吉現代美術館「ヤジ手帖をつくる日」
みのかも文化の森 美濃加茂市民ミュージアム みのかも annual 2017 「On location」 「アート・ドッキングツアー」
中川運河でてく散歩 中川運河リコライン・アートプロジェクト作品展示「ツナガルブック」 「いかした日傘で運河をたのしもう」
一宮市 三岸節子記念美術館「ミギシラボ」
文化フォーラム春日井「わたしとサボテン写真館」
愛知県児童総合センター「大きなTENTO」
2018年 織り目の在りか 現代美術館 in 一宮「織り目のみりょくヒント集」をつくらう「おでかけ記念撮影会」 「きもちのおと」
愛知県児童総合センター「ちいさなやくそく その2」 「ミラーニューロン・トレーニング」 「ちいさなやくそく」
みのかも文化の森「森の「焦げ地図」をつくらう」 「ブルーシート本をつくらう」
しだみ古墳群「こふんとあそぼう」
2019年 名古屋大学キャンパスミュージアム展「仮説をつめた本をつくる」 「あいとりエンナーレ2019」 コーディネーター

と、恩師との出会いだった。「美術教育、幼児美術が専門の前田ちま子先生(名誉教授)がいっしょって、名古屋ボストン美術館でプログラムを行う課題がありました。その時期に開催される展覧会に合わせたもので、一般の入場者に対して行うものでした。その経験ですね。作品を調べ、自分で面白いと思ったことをお客さんに伝えて、その反応が返ってくる。ぜんぜん思うような反応でなかったり、ときには辛くて泣きそうになったり。それでも作家を研究しているだけでは得られない魅力を感じました。参加者によって、同じプログラムでもまったく違う着地点に辿り着いたりします。とにかくそのことが面白かったですね。先生はそんな機会をたくさん与えてくれました。

学生時代には、恩師ともう1人、現在も共に活動を続ける友人(近藤令子)との出会いもあった。「4年生のときに“フジマツ”(近藤、松村の真ん中を取って、藤松=フジマツなのだそう)というユニットを組んだ

んですけど、彼女と一緒にアートプログラムを行い、自分たちだけでもプログラムがやれると実感できたことが嬉しかったですね。NHK教育テレビの『ハッチボッチステーション』という番組が好きで、その中にキュレーターを面白おかしく紹介するコントがあったんです。「日曜美術館」のパロディみたいな感じで。日用品を大袈裟に紹介するんですけど、それが面白いねと話してるうち、デュシャンのレディ・メイドにもつながるんじゃないかと、深夜のファミレスで2人で大いに盛り上がりました。それでできたのが最初のプログラムだったんですよ(マルセル・デュシャン: 既存のものをそのまま、あるいは若干手を加えただけのものをオブジェとして提示した「レディ・メイド」を数多く発表。作品「泉」が有名) さまざまなものを従来と異なった角度や新しい視点で見ることで新たな魅力を発見しようとする姿勢は、このときすでにできあがっている。

「ぜんぜん自分の知らなかった魅力的なことを知ったときや自分が思い込んでたことが違うと解ったとき、パッと目の前が明るくなったような、視界が開けたっていう感覚になります。たぶん、誰にでも経験のある感覚だと思いますが、私はプログラムをやっているとそういう気持ちになります。そんな感覚をみんなに抱いて欲しくてプログラムを作っているんですよ。パッと世界が広がったようなあの気持ちを、一緒に味わいたいんですよ。

発想の根底には、目の前にあることを楽しむことがあるようだ。深夜のファミレスでの雑談を見せられる形まで持っていくには苦労もあったと想像できるが、それを成し遂げ、アイデアを現在まで大事にしていることには敬服する。研究室の本棚は、やがてさまざまなもので埋められていくのであろう。どんなもので埋められていくのか。きっと楽しいものになるに違いない。



名古屋芸術大学
産学官連携
プロジェクト
Vol.3



本学講師 三枝樹氏により、1テーマ4～5人ずつになるように、学生の希望を聞きながらチームへの割り振りを調整



名古屋芸術大学 × 中部文具工業協同組合 「2020 文具デザインプロジェクト」 キックオフミーティング

2020年6月24日、本学と中部文具工業共同組合加盟の文具メーカー4社との産学連携企画、「2020文具デザインプロジェクト」の1回目のミーティングが行われました。このプロジェクトは、デザイン領域の学生が受講する「デザイン実技Ⅳ」の講義で、3年次までに習得したデザイン技術や知識を用い、商品や製品の企画、調査、開発、製造、販売までを見据えデザイン提案を行うという実践的な内容の講座です。文具メーカーと相談しながら提案を考え、優れた提案は製品化もありうる夢のあるプロジェクトです。

今回は初回の授業で、メーカーと学生の顔合わせと課題テーマの発表が行われ、学生はどのテーマに取り組むかを決定します。メーカーごとにプレゼンテーションの時間を設け、各メーカーの紹介とテーマの発表、それぞれの独自技術や特徴の紹介がされました。

プレゼンテーションに先立ち、履修した学生が自己紹介を行いました。デザイン領域の4年生が履修する講義であり、それぞれに自分の専門と趣味などを紹介しました。デザイン領域のさまざまなコースの学生に院生も含まれ、多様な学生が集まりました。

課題テーマは、森松産業株式会社様「在宅ワークで頭を切り替える! テーブル周りグッズ」、株式会社馬印様「with コロナでの学校生活」、大同至高印刷株式会社様「オープンキャンパスで配るPPノベルティグッズ」、シヤチハタ株式会社様「授業中のノート作りを助ける筆記具・スタンプ」の4つ。コロナ禍の昨今を反映した課題や、学生にとって身近な学校や授業をテーマとした課

題となりました。4月からオンラインで自宅から受講する学生にとって、自身に関係のあることでもあり、考えやすいテーマではないかと思われる。

プレゼンしていただいた各社担当の方からは、「予算や原価も考えて相談し提案して欲しい」「いいアイデアはぜひ製品化したいと社長からのいわれている」「実現可能なアイデアを求めている」などの取り組みを非常に現実的に捉えており、この機会からいい提案が生まれることを期待するコメントがありました。

三枝樹成昭講師からは、このプロジェクトの目的と、メーカーの専門家を含めたデザインプロセスの説明、また、参考としてこれまでの

プロジェクトで提案された作品の紹介がありました。

学生はプレゼンを聞き、それぞれ希望するテーマを選択、1テーマ4～5人ずつになるように割り振られました。グループごとに集まりメーカーの方とミーティングし、現行商品や企業が保有する技術などについて質問したり、これまでの商品化の背景などの説明を受けたりしました。

今回のキックオフミーティングは、3密を避けて大教室で行われましたが、今後は基本的にオンラインで講義を行い、Facebook上で状況報告、7月中旬に状況報告の中間チェックで集まり、8月上旬にシヤチハタ株式会社様 大会議室での最終審査を行うという予定となっています。どんなアイデアが出てくるか、期待がふくらみます。



森松産業株式会社
のチーム



株式会社馬印のチ
ーム



大同至高印刷株式
会社のチーム



シヤチハタ株式会
社のチーム



表紙の写真

幼保連携型認定こども園 森のくまごでのお昼時間。おいしそうなおはんでみんな笑顔。下駄箱横には本日のメニューが貼り出され、ガラス越しに大きな鍋でたくさん作っている様子うかがえます。



「名古屋芸大」
グループ通信
ウェブサイトを



発行：名古屋芸術大学
企画・編集：広報企画部
デザイン・協力：くまな工房一社
印刷：株式会社クックス
発行日：2020年7月17日

【お問い合わせ先】
名古屋芸術大学 広報企画部
〒481-8502
愛知県北名古屋市熊之庄古井281番地
電話 0568-24-0359
FAX 0568-24-0369
E-mail: grouptu-shin@nua.ac.jp

